
『必殺非業』・・・？え、なにそれこわい

明石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『必殺非業』・・・？え、なにそれこわい

【Nコード】

N7205M

【作者名】

明石

【あらすじ】

突如死んでしまった主人公は、何故か戦国BASARAの世界である人物になってしまった！

平和に暮らしたいと思っても、時代と立ち位置と自身の気質と周囲の勘違いがそれを許さず、なんとか今日も生き延びようと奮闘するハートフル？ストーリー

初投稿作品です。拙い文章ですがよろしくお願いします。

また、主人公が色々勘違いされる勘違い系なので、ご了承ください。

9月6日 不定期更新となります。申し訳ありません。

序章 どうしてこうなった と双竜を目の前にして心中で叫ぶ（前書き）

時間軸は『戦国BASARA2 外伝』小十郎ストーリーあたりから、オリ展開する予定です。

序章 ぶつしてぶつなつた と双竜を目の前にして心中で叫ぶ

人取橋の戦い

洞窟内にて

今、目の前で明らかにカタギじゃない感じの侍が俺をすっごい睨んでいる。その少し後ろにいる隻眼の侍も、鬼気迫る表情で睨み付けてくる。もし目からビームがでるなら俺は蜂の巣どころか跡形も残らないだろう。この世界ならそんな技があっても、ありえなくもないから困る。なんかバチバチ電気出てるし。

正直、恥も外聞もなく逃げ出したいが、そうしたらあの爆弾魔が俺を殺しにくるだろう。付き合いただけは長いんだ。躊躇いもなく、むしろ笑いながら殺しに来るのが目に浮かぶ。

ならば目の前の二人の味方をしようかとしても・・・

『少し話を「松永の部下なんぞに開く口は持たねえ」・・・』

バツサリですよ。

仕方なく俺は我が家に伝わる舞を踊る。長年やってきたせいで、これをやらないと戦うだけのテンションにもってけなくなってしまう

っているからだ。俺は後ろで待機させていた政康と友通を一緒に
“踊らせる”

そして短い舞が終わると、覚悟を決めて前の侍二人と対峙する。
気分はまさに 前門の竜、後門の梟。でも『仕方ない』 願わく
は死にませんように。クソ上司が爆発しますように。

『鋭く、素早く終わらせる。それが情け。』

しかし、この舞はキザな台詞が多いなあ。

松永軍の死神部隊、三好三人衆が筆頭、三好長逸。

この話はこの人物になってしまった元役者が戦国BASARAの世
界でなんとか生きていこうとする、（主人公の）ハート（が）フル
（ボッコな）ストーリーである。

(ギヤアアアー！やっぱりバチバチしてる！ヘルプ！ヘルプミー！ヘルペスミーアアア！)

すぐに終わるかもしれない・・・(人生的な意味で)

序章 ようしてこうなった と双竜を目の前にして心中で叫ぶ（後書き）

誤字、脱字がありましたら、報告お願いします。

第一話 過去の失態ってのはかなり根強く残ってる(前書き)

キャラの口調が掴みきれない……。拙いですがどうぞ。

第一話 過去の失態ってのはかなり根強く残ってる

どうしてこうなった・・・

もはや何回（心中で）叫んだことが

そもそも何で俺がこんな目にあっているんだ。

松永の悪事の片棒担いで各地に恨みを買って、今だって「奥州の双竜」なんて

化け物と命惜しさに戦っている。

ていうか防戦一方。

何度だって言うぞ

どうしてこうなった

その時、俺の脳裏に今までの人生がダイジェストに流れ始めた。（
走馬灯ともいう）

生前・・・というのもおかしいが、この戦国BASARAの世界に来る前、『俺』は一介の役者だった。それなりに良い評価をもらっていたし、仲間付き合いもうまくやれていたと思う。パシリにされてはいなかったと思いたい。

しかし、それなりに充実した生活はリハーサル中に突然意識が途切れて終わった。照明の落下か舞台下の奈落に落ちたか、おそらくそんな感じで死んでしまったんだろう。何故かは知らんが無意識にそう感じとった。

その後目を覚ましたら、古臭い、しかし格式のある屋敷で赤ん坊になっていた。

最も前世の『俺』の記憶がはっきりしてきたのは三歳くらいからだ。だが、当時の俺の様子は傍目からみたら、さぞ気味が悪かっただろう。

武家の子としての教育を受け、一部の武将などにもみ発現する婆娑羅という力について学んだ時、やっとこの世界が戦国BASARAの世界だと知った。さらに元服した際、三好長逸なんて名前になっちゃって三人衆かよ！って絶望したりした。

他にも色々あったが、今日の前で伊達政宗と片倉小十郎と対峙しているという最悪の状況をつくってしまった原因はやはりあいつだろう。

松永久秀

奴が三好家に仕官してから三好の重鎮がバンバン死んでいった。しかもそのほとんどが事故死（という名の暗殺）や変死（という名のry）、進言による粛清だったりして、しかも証拠がみつからない。俺自身も“松永久秀”という人物を歴史の知識から知っていなかったら疑わなかっただろう。それくらい鮮やかな手口（暗殺）だった。

その時は俺もそこそこの名が上がって（不本意だったが）いた武将の一人だったため松永に声をかけられた時、心臓が止まるかと思った。そして奴が「卿は何が欲しい？」なんて聞いてくるもんだから、半ばパニックっていた俺は奴が好みそうな答えを言って媚びを売ったんだ。

そしたら気に入られてこのザマだよ！

もしかして自業自得ですかorz

いやあの頃は仕方なかった！うん！今を精一杯生きればいいさ！

そう、精一杯・・・

ギン！ガキン！ドゴオン！

「チイツ、厄介な連携だな・・・！」

「ハッ！俺と小十郎の連携以上とはな・・・、それでこそ闘り甲斐があるってもんだぜ！！」

無理無理無理無理！！

このままじゃ死ぬ！

それなりに戦えていたかななんて思ってたけど、そんなことはなかったぜ！！

二人とも強すぎる！

畜生！死んだら化けて出てやる！

「HELL DRAGON！」

ギャー！ヘルドラゴンって・・・

直撃したら普通に死ぬ！

ええい、惜しいけど命には代えられない！

俺は先の戦闘で役立つてくれた三人衆の“三好政康”“岩成友通”を

盾にして攻撃を凌いだ。

第一話 another side (前書き)

z 口調に違和感があるかも・・・尽力するので勘弁してくださいor

第一話 another side

片倉小十郎 side

ドゴオオン！

「ハア・・・、厄介な奴らだったぜ。」

政宗様はそうぼやきながら刀を納めた。

かくいう俺も今回の敵にはかなり苦戦した。
三好三人衆という部隊が>死神部隊<と恐れられているのは知っていたがここまで強いとは・・・。

隊長の三好長逸という男が攻撃の合間に密かに合図を送り、それに他の三人衆、三好政康、岩成友通が素早く従い、まさに三位一体の連携をものにしていった。

これはつまり三好長逸を他の二人が全面的に信頼しているという」と。
誤った指示は即座に死に繋がる戦場において、

「この人になら命を預けられる」

このように思わせられる人物は敵味方問わず、尊敬できる。

惜しむらくはそのような素晴らしい人間が松永のような悪党の元で働いていることだが・・・

(松永を斬った後、改めて勧誘するのも悪くなかったかもしねえな。)

きつとやむにやまれぬ事情があったんだろう。話し合いに乗ってやれば良かったな。

後悔の念が湧いてきたが、今は松永にオトシマエつけてもらわねえとな、と気合いを入れ直し、なんとなく三人衆を吹き飛ばした場所に目をやると

信賴していた人物に盾にされ、黒焦げになった亡骸とその後ろで無事である外道がいた。

伊達政宗 side

「ッ！テメエ！」

思わず声が荒くなる。当然だ。さつき討ち取ったと思った奴があるうことか部下を盾に生き延びたのだ。死ぬのが怖いのは分からなくも無いが、手前の為に命張ってくれた部下を盾にするなんざ、上に立つものとして認められねえ！

『……何を怒っている？』

しかも、本人はまるで当然のように平然としていやがる！畜生！松

永軍にはこんな外道しかいねえのか！

「もう許さねえ！とどめを」お待ちを！政宗様、松永軍の兵が！
ッ！」

shit！松永と殺り合う前にこれ以上消耗するのは不味い！

「……仕方がねえ。政宗様！先を急ぎましょう。」

……OK、小十郎。だがその前にどうしてもコイツに聞いてみたいことがあるんだ。

「……テメエにとって、そいつらはなんだ？」

そう言って今はもう見る影もない二つの亡骸を指して尋ねた。

『……？道具だ。決まっているだろう？』

まるで当然のように・・・いや、奴にとっては当たり前のことなんだろう。所詮悪党か、そう思ったが突然詠うように三好が喋りだした。

『一人減ったら、一人足す。二人減ったら、二人足す。三人減ったら、それで終わりだ。』

・・・要するにそれがコイツの・・・いや、三好三人衆の在り方なのだろう。それを聞いて、理解した。

コイツらは武士でありながら忍びのような在り方をしている。おそらく、『道具』というのは自身も含めて言っているんだろう。

確かコイツらは松永に加担して三好主家乗っ取りを実行したって情報忍びから聞いたが・・・

（“在り方”といい、主家乗っ取りといい、松永に絶対の忠誠心を持って持っているってことか）

だとしたら、もう言うことはねえ。俺の元にも俺の為に命捨てようとする馬鹿野郎がいるし、コイツらも形が違うだけなんだろう。納得できねえが

俺たちは松永の元へ急いだ。

人質を取り返す為に・・・

第一話 another side (後書き)

次話で種明かし(笑)です。

第一話 主人公 side というより種明かし(前書き)

BASARA設定では、三好三人衆は三人兄弟です。史実ではどうだったか、わかりませんでしたm(_____)m

また、主人公の能力等、オリジナル設定盛りだくさんなので、ご注意ください。

第一話 主人公 side というより種明かし

ドゴオオン！

・・・し、死ぬかと思った。直撃くらってたら死んでた。何で俺の人生こんなばっかなん・・・

ってギヤー！

予想はしてたけどやっぱり！ 耐えられなかったか・・・政康、友通。

後で『修理』してやるから勘弁してくれー！

俺が元服した時、名前が三好長逸となったため、この世界においての自身の立ち位置を把握した。

よじするにちられ役。

なんせ三人揃ってようやく戦えて、それでも負ける姿しか想像できないような奴だぞ！（主人公の偏見入りです）

いや決めつけるのは駄目だ。もしかしたら転生ボーンナスで俺にも婆娑羅の力があるかも、と思い、鍛練も頑張ってみたが・・・

衝撃波を真っ直ぐ撃てるようになりました

完

・・・不安だorz

他国の情報も逐一入ってくるんだけど、（噂レベルだけど）

一度に数十人ブツ飛ばしたとか、

空を飛んだとか、

機巧要塞を造ったとか、

それを一人で壊した奴がいて、国費が火の車とか、

・・・心当たりありすぎorz

さらに不幸は続いた。

本来三好三人衆となるはずの三好長逸の弟、三好政康、岩成友通がいなかったのだ。

俺のこの世界の親は、母は俺を生んだ際、不幸にも死んでしまったらしい。父は俺が幼い頃、戦で討ち死に。つまり、俺に弟が出来ようもないのである。

母の件については、もしかしたら俺のせい？ と罪悪感があったが、それを知って間もなく初陣で色々あって気にする余裕は無かった。

話しがそれた。

要はこのままでは某無敵（笑）のような

『三人衆は俺一人！』

みたいな感じになってしまっ！

いつそ出家してしまえば楽なんだろうが、本来生まれるべきだった三人衆を俺が消してしまったんではないかどうしても考えてしまって、せめて形だけでも頑張ると決めていたのだ。

そんなふうに陰鬱な日々を過ごしていた中、部屋に飾っていた鎧になんとなく触れてみたら

何故か中身の無い鎧がいきなりブレイクダンスをしだした。

あれには驚いた。棒立ちの体勢のまま半刻ほど固まったぐらいだ。ついでに脱^ビしてしまったのは俺の一番の黒歴史だ。徳川家康じゃあるまいし、前向きに絵に残したくはない。

その後、独自に色々と試した結果、あの「武者鎧ブレイクダンサーデビュー事件」は俺の婆娑羅の力のせいらしい。

『触れた物体を動かせる』

ただし、その物体の形状のみで出来る動きしかさせられない。

つまりコマに使うと回ったり転がったりすることしかできないが、鎧等の人型の物体なら人と同じ動きに加えて、関節を逆に曲げたりも出来る。

また、動かす際の運動エネルギーの大きさはどうなっているのか、鎧と取っ組み合いで試したら、ちょうど俺の本気の力と同じだった。

最初負けて泣きたくなかった。

だがこの能力を理解した俺は確信した。

いける、と。

長時間動かせる限界はせいぜい鎧くらいの大きさが二つだが十分だ。

『三好三人衆』を造るには十分だ！

決して裏切らず、能力で指示を出せば絶対服従！強さは俺と同じだが、強くなればどうとでもなる！

こうして出来たのが、俺、三好長逸のバサラ技

『三好三人衆』

故に一人減っても、二人減っても足せばいい。

でも三人目（俺）だけは勘弁な！

結局負けたけどね！

何だよあのチート主従は・・・

俺の婆娑羅はゲームでいうところの補助技、しかも攻撃技はシヨボ
い衝撃波のみ。

そりゃ負けるわorz

まあ、勝ち負けは正直どうでもいい（お

要は生き延びればいいのだ。

俺の目標は乱世の終結・・・まで生き延びて、悠々自適に暮らすこと！

元の世界に戻りたいと思わなくもなかったけど、死んだっばいしなあ。

せめて命の危険が無くなればよし！そしてその為には松永久秀の存在が非常に邪魔！

日夜監視されて（わからないけど絶対してる）いやいや悪事させられて（そのせいで各地に俺に対する恨みが）逆らったら暗殺される！（絶対する！『三好アボン事件』数少ない生存者の俺が言うんだ、間違いない！）

というわけで今回の伊達軍の襲撃は俺としては（巻き込まれなければ）むしろチャンスなのだ。

伊達が松永を討てば最高！そうでなくとも戦のどさくさに紛れて逃げることも不可能ではないはず！

あのチート共は先に行ったようだし、周りを注意深く見渡して・・・よし！

いざいかん！平穏な世界へ！

シユタ!

「長逸様、松永様の手により伊達政宗、片倉小十郎が崖から転落しました。伝言です。』まだ暴れ足りないだろう、差し支え無ければ伊達の残党を追撃するといい。』だそうです。」

.....

ド畜生オオオオ!!!

だから忍びは嫌いなんだ!本当に何処にでもいやがる!しかもこの伝言!要するに

「伊達を追撃しないと“不幸な事故”に会うかもしれないなあ（笑）」

って意味ですね、わかります。

俺に平穩はないのかあああ！！！！

第一話 主人公 side というより種明かし（後書き）

三好三人衆のあのセリフを能力で表したら、と考えたらこうなりました。原作では普通に三人共喋っていました。この作品では長逸しか喋りません。

松永久秀の回想（前書き）

中途半端に史実をいれているので、BASARAでは出てこない武将の名前とかが出ています。また、松永久秀のキャラは謎すぎる為、今作品の松永久秀に違和感を感じると思われます。ご了承ください

m () m

松永久秀の回想

長逸が追撃の命に絶望していた頃、切り立った崖に囲まれた、さながら決闘場のような 実際は尋問兼拷問兼鑑賞兼処刑場として使われた悪夢のような場所で一人の壮年の武将が忍びの報告を待ちながら、今は自らの元で働いている、かつて三好家にいた“同胞”と初めて会った時のことを思い出していた。

ちなみに、これはこの武将の単なる暇潰しであり、回想が終わっても忍びが来なかった場合、武将の周りで磔にされ、命綱一本で命を繋いでいながらもうるさいくらいに叫んでいる兵士 伊達軍の人質がまた一人崖下に落とされることは想像に難くない。

幼い頃からなにかしら物を集めるのが好きだった。どうしようもなく好きだった。 誰でもそのようなことはあるだろうが、そのためなら奪うことも、騙すことも心を痛めることなく、むしろ喜んでやった。 歳を経て、知識を蓄え、分別を知ってなおその欲望は収まることはなかった。

育ちに問題があった訳でもない。それなりに裕福でそれなりに愛されもしたのだろう。だが漠然としながらも、おそらく『松永久秀』という存在はただどうしようもない、まるで子供の我が儘そのものであるというのが、理解できた。

三好家に近づいたのは、自らが重用されるまで成果を挙げた後、当主と邪魔な重鎮を潰し、適当な愚者を当主に添えて傀儡にする事で畿内を支配する為だった。畿内は物流が盛んであり、茶器等の芸術品に造詣の深い者も多い。必然的に名器が多く生み出されるこの土地を奪い、思う存分茶器を愛でたかったのだ。その為の三好家の“間引き”をしている途中で

“同胞”と会えたのだ。

ただの気紛れな問いかけだった。

「卿は何が欲しい」

どうせ「御家の為」等の偽善者らしい言葉を返すだろうと高を括っていた。

他の武将も大抵そのような戯れ言を吐いていたのだから。最も今はもう“不幸にも”この世を去っているのだが。

まして今回の標的は若輩者ながら三好にその人ありとまで言われるほどの猛将、三好三人衆筆頭の三好長逸。他の三人衆の三好政康、岩成友通は先の戦いで討死したそうだが、現当主の三好長慶と同じ三好一門であることを考えると生かしておく都合が悪い。

上に立てる者は無能でなくてはならないのだ。故にこの問いかけは完全に気紛れだったのだ。私の中では既に殺す算段を立てていたのだから。そのためか私は三好長逸の行動に度肝を抜かれることになった。

流れるような動きで、私の前で臣下の礼をとった後、

『将軍の首を』

天をも恐れぬ言葉を放った。

不覚にも思考が暫く停止するほどの衝撃を受けた後、私はもしかと思ひ、さらに問いかけた。

「・・・何故そのようなモノが欲しいのだ？」

すると身体と声を歓喜に震わせながらこう言った。

『戦乱を・・・一心不乱の戦乱を・・・一心不乱の大戦乱を！』

この心からの叫びを聞き、確信した。

方向性が違えど、私と同じ、“どうしようもない”存在であることを

将軍暗殺は三好家乗っ取りを成功させた後、検討していたことだ。かつて権威を奮った将軍家とはいえ、もはや見る影もないほど衰えている。それでもその影響力は侮れないもので乗っ取りを成功しても横槍を入れられ、畿内の支配の妨げになりかねないからだ。悪名

が世に知れ渡るだろうが知ったことではない。
実は『剣豪将軍』足利義輝の集めた名刀が欲しいというのが大部分を占めているのだが

少し本音が漏れたが話を戻そう。

この將軍暗殺に関しては私は未だに準備にも入っていない。現段階ではただ私の内の構想でしかないのだ。

それなのに目の前の男は私の考えを、いや私という人物を見抜いた。私はまだ、少なくとも將軍暗殺などをしそうな人物だと思われるほど、悪名高いことはしていない。

にも関わらず、私の思惑に気づくということは私の本質を見破っていることに他ならない。

その上で將軍暗殺に協力させると言ってきたのだ。戦乱の拡大という理由で

良心の呵責もなく

おそらく私と同類故に

その自らの欲望に真っ直ぐな“同胞”を見て、長い付き合いになりそうだな、と柄でもないことを感じながら彼を我が陣営に受け入れた。

余談だが、後に織田が侵攻してきたため、一時期織田に下った際に“どうしようもない”人物にまた一人会えたため、案外少くないのかもしれないと愉快的気分になったのだった。

回想が終わり、周りを見渡す。忍びは既に来ていたようだ。私はふと身につけていた脇差しが邪魔に思えて、つい抜き身のまま放り投げってしまった。

ブツッ！

「うぎやあああああ！……」

おや、鎌鼬でも出たようだ。可哀想に。

忍びの報告によると自軍は三好政康、岩成友通、十河存保が討死、伊達軍は主だった武将は討てなかったものの追撃の甲斐があつて大半が重傷らしい。

たいした損害ではない。三人衆は長逸がいつも通り“調達”してくるだろう。

残った伊達の人質は……まあ何かしら使えるだろう、牢に入れておくとするか。

そろそろ撤退するでしょう。龍の爪を早く拝見したいものだ。

松永久秀の回想（後書き）

主人公はパニックになっていたとはいえ、何気にとんでもないことを口走っていました（笑）

松永の気にいるような言葉を沸いた頭で出した結果がこれだよ！

史実で三好三人衆が將軍暗殺に協力していたのを思い出して、勧誘に来たのだと勘違いしたうえ、従軍するハメになりました。

松永久秀に親近感のようなものを感じさせてしまい、以後幾つもの戦乱に身を投じるようになったのです。

主人公の完全な自業自得でした。

主人公設定（前書き）

一話を全部読んでからお読みください。

主人公設定

『必殺非業』

三好三人衆

三好長逸（主人公）

三好三人衆の筆頭

現代で死んだ後何故か戦国BASARAの世界で三好長逸として生を受けたヘタレ。

現代では役者をしていたためか、若干芝居がかった口調プラス得体の知れない雰囲気プラス口下手プラス自身の能力のせいで色々勘違いされている。

ほとんど役者関係なかった

戦装束は原作準拠。素顔は無表情な強面を想像してくれれば

武器は原作同様の長剣。

個人の強さは一般武将以上婆娑羅武将未満

命惜しさに松永に媚び売ろうしたら、『同類』と勘違いされ、共に行動する羽目になった。松永の悪事の片棒を担ぐが、その際さりげなく敵味方両軍の被害を抑えるようにしている。

能力『三好三人衆』

長逸が偶然気づいた能力、『物質を動かせる』能力を元に造り上げた二体の鎧人形。

武器は原作同様の槍。

それぞれ元ネタの『三好政康』『岩成友通』と名前をつけている。

二体の区別はしておらず、ぶっちゃけどっちでもいい。動く際の力の強さは長逸本人の力量に比例する。長逸のイメージ通りに動くので完璧な連携を実現できる。

人間並みの動きをさせて長時間動かすには二体が限度。色々応用が効く。

あくまでもモノであるため、長逸は躊躇いなく盾にするのだが傍目から見ると外道である。

ちなみに長逸は三人衆は人形を使っているというのは既に知られているものだと思っている。勘違いの要因である。

『衝撃波』

剣を地面に叩きつけることで直進する衝撃波を出せる。当たると人

一人は吹き飛ばす。

新技考案中・・・

主人公設定（後書き）

後になって能力を見直すとH×Hの操作系だと思った。
オリジナリティが足りませんでした（泣）

第一 / 五話 年寄りの話としつこい自慢話は聞き流すもの（前書き）

お久しぶりです。明石です。

事情により、週一投稿を目指していたのにすぐ頓挫してしまいました。

豪語しておいてこの始末。本当に申し訳ありません。

お気に入り件数や感想もかなり多くなっていて、とても驚きました。ありがとうございます。

これから先、不定期更新となってしまうですが、どうか生暖かく見守っていただけたら幸いです。

また、悩んだ結果、『戦国BASARA3』も少しだけ展開に入れることにしました。

あと、今回は少しシリアスです。

第一 五話 年寄りの話しとつこい自慢話は聞き流すもの

平城京

かつて栄華を誇ったものの今ではこの上なく寂れた廃墟が松永軍の本拠地である。

無論防衛に向いたところでは無いが松永曰く「この虚しさが心地好い」とごり押しして本拠地にしたのだ。

松永は建築の知識も豊富な様で、その知識を無駄にフル活用させ、見た目寂れた感じを残しながらも地形を活かした爆襲（松永軍の十八番。壁を爆破して無理矢理奇襲する）を可能にしたり、侵入した敵を包囲出来るよう各門を強化したり、何か怪しい香炉（正体は知りたくもない）を設置したりしたせいで、下手な城よりも優れた防衛能力を持つ要塞になってしまった。

これで見た目廃墟なのだから出鱈目というほかない。

俺はその中の軍の主だった武将にあてがわれる個室で一人、懐に入れている位牌に対し黙祷をしていた。

礼法も何もあつたものではないが、忍びに見つからない為の苦肉の策だ。

俺が祈りを捧げているのは今回の襲撃で亡くなった敵味方両軍の將兵達に対してだ。

最もこの行為は自身の罪悪感を払拭させる為の、松永じゃなくても偽善というような情けないものなのだが、こうせずにはいられな

った。

他の将兵は、例えば主君に忠誠を誓っていたり、大義があったり、いわば“誇り”をもって戦っている。

松永の下にいる将兵ですら、松永を慕っている者が多い。

俺はどちらでもない。

松永にはうんざりしているし、ただ殺されるのが嫌で利用価値を示そうと成果を挙げているだけに過ぎない。

“誇り”と思えるものが何も無いまま人を殺している。

三好家にいた頃に“敵”を殺すことに躊躇いは無くしたが、なんら関係のない民や兵を殺すことに慣れる筈がない。

略奪や襲撃を遂行する度に自分が酷く惨めに思える。

なるべく死者を出さないよう努力しても、村に対し略奪を行った後でバレない程度に物資を返しても、やはり死者はでるのだ。

なのにこうして祈りをして赦しを乞う。

俺はある意味一番性質の悪い悪党なのかもしれない。

黙祷を終え、前に起こった「人取橋の戦い」での詳細を見直す。半

ば盗賊団とはいえ、戦後処理は重要だ。

俺は陰鬱な気分のまま作業に取り掛かっていたが、この戦の詳細を見ているうちにある希望が見えてきた。

戦場では緊張していて気づかなかったが、もしかすると“ストーリー”に入っただのではないかと

“三好長逸”になる前の人生での知識は少し風化していつているが、その時ハマっていたゲーム『戦国BASARA』シリーズの中で似たような展開があったことを思い出したのだ。

確かその結末で松永は伊達政宗、片倉小十郎に討たれた筈。

勿論この通りに進むとは限らない。

俺が知ってるのはあくまでゲーム内のストーリーなのだ。それが実際に今生きているこの世界でそのまま起きるといふ都合の良いことがあるだろうか？

それに“ストーリーという運命”がそのまま実現するというのは、なんか自身やこの世界の人物の運命も決められているんじゃないかと不安になるといふのもある。

だけど今の悪党ライフよりはマシだ。

俺はひとまず忍びを使って伊達主従の安否を確かめる為に許可を取りに行くことにした。

結論から言うと二人とも生きているそうだ。

松永が既に調べていたのを聞いたただけだな！

あの野郎、何が「竜の方はわからんが、右目の方は戦うのに支障は無いそうだ。存分に戦うといい（笑）」だ！

絶対に俺をぶつける気だよ、この老害！

しかも何故かいきなり話題変えられて松永のコレクション自慢話になってしまった。

竜の爪を手に入れてすげえご機嫌らしい。

なんか凄そうな香炉を出してきて話し始めたが、松永の話は基本的に聞き流すことにしている。

松永は戦などの活動をしてない時は自身の苛烈さを潜ませて一見温厚な雰囲気をもつ人物になっているが、そんな状態のまま非人道的な発言がバンバン出てくるものだから、まともに話を聞いていると道德観が一気に変えられてしまう感じがするのだ。

また、悪のカリスマのようなものなのだろうか、松永の言葉は話す内容によっては道德心の陰にある人の“ケダモノ”と言える部分や脆い部分をつついてくる。俺が前の人生の平和な時代の道德観を持つていなかっただらと思つとぞつとする。

「
のような効果が期待できる香なのだよ。まあ副作用として

のような症状が見られるが、これらの香を戦で使ってみたら面白いとは思わないか？問題はこれらの香の使用に耐えうる香炉が有名な品ばかりという所なのだが……。

炉の方は織田にいた時に 渡したものだが喜んで使っているらしい。

試作品ということの一つ好きなものを持っていくといい。

他の将にも持ちかけたのだが色好い反応ももらえなかったのですね。」

アレ？まずい、話の流れくらいは掴むべきだった。

「さあ、どれがいい？」

まずい、マジでヤバイ。

仕方なく、適当に選ぶ。

『ではこの香炉を……ありがたく頂きます。』

「……クツクツクツ。卿も思ったより残酷だな。」

それはない。少なくともお前よりは。

「それは風向きに気をつけて使うよう心掛けたまえ。まだ優秀な将を失いたくないのですね。」

え、なにそれこわい。

> 松永久秀 side <

長逸が部屋を出ていった後、ふと喉の渴きをおぼえた。

自ら点てた茶の残りを味わいながら飲み干す。どうやら思ったより話しに熱がはいっていらしい。含蓄を語れる相手がいるというのはやはり幸いなことだ。

おそらくほとんど理解してなかっただろうがまあ仕方ない。話し相手がいるだけ十分だ。

しかし予想通りのものを持っていったな。

『縛心香炉』（ばくしんこうろ）

その香を嗅いだ者は表向きは何も起こらない。体調が変わる訳でも人格に影響を及ぼす訳でもない。

ただ使用者に逆らえなくなるだけだ。

香を嗅いだ後に認識した人物に対する敵対的行動、思考する際に抵抗を感じるようになる。

勿論、私には一切効かないように対処している。

奴を認めてはいるが信じてはいないし、それは向こうも同じだろう。自身の為互いに利用し、いざというときは切り捨てあう。そんな関係こそ好む所だ。

弱きは罪なのだから。

まあ奴ならうまく使ってくれるだろう。

今回の“生け贄”には同情を禁じえないな。

さて伊達軍の対処法を考えなければな。

風魔衆と接触を計るか。金を積みばいくらか働いてくれるだろう。

伊達にも優れた忍びの集団がいたはずだ。黒脛巾組といったか。

だとすれば此処を嗅ぎ付けていても可笑しくない。どこかの軍の忍びがうつっているのは確認している。

向こうにしても盗賊団に敗北したとなると沽券に関わる。確実に来るだろう。

となると少数精鋭の電撃戦をしてくる。

他国の領地を横切ることになるから他国の者に見つからないよう最短距離を少数で突っ走るしかなくなるだろうから。

周りの国に婆娑羅者不在という隙を見せる訳にもいかないという都合もあるだろうが。

我々の軍は練度こそ低いが“協力者”がいる。そのおかげで各地で動いても雲隠れできるが向こうはそうはいくまい。

以上の事を念頭に置いて我々が迎撃に使える場所は・・・

> 主人公 s i d e <

『長谷堂風雲戦』はないだろうな。

もし俺の知っている“ストーリー”通りになるなら長谷堂城で片倉小十郎と戦うことになる。

これらの前世の知識は鵜呑みにせず、参考程度に考えさせてもらうことに決めた。まるつきり活用しないで置くには勿体ないし、かといって鵜呑みすると世界が怖く見えるからだ。

話しが逸れたが、確か長谷堂城は最上義光の持つ城の一つだったはず。

俺が思い出したストーリーでは出てなかったがこの人物がいる時点で俺の知識は大して意味を持たなくなっただと思う。

今の状況は『戦国BASARA2 英雄外伝』のストーリーに似ているが最上義光は『戦国BASARA3』で出てきた人物だからだ。

そのため、『長谷堂風雲戦』は起きないと予想している。

まさか松永も領主相手に喧嘩売るなんてしないだろう。伊達には喧嘩売ったがこれ以上敵対勢力を増やそうとは考えない・・・はず。松永は破滅的ではあるが、保身を全く考えない奴じゃない。

先の展開は大して良くない俺の頭じゃ読めない。

今はただ此処に伊達がたどり着いてくれるのを祈るのみだ。

それに何とかあのチート共をやり過ごす方法を考えなきゃな・・・

とりあえず貰った香炉はとつとくか。何か使えるかもしれないし。怖いけど。

まずは壊れた人形を直さないと。これが無いだけで俺はかなり弱くなる。一応一人で戦う用の技もあるが副作用が辛いのでやりたくない。『三好三人衆』用の人形は鎧兜に安定の為の重りを入れたもので、耐久性が重要なため最高級のものを使うようにしている。なので壊れた際の費用が半端でないのだ。ポケットマネーで何とかしているが、正直きついものがある。

だがこれから戦いが激化するのには目に見えているので出し惜しみできない。俺は今回の戦いで討死した十河存保さんの鎧兜の部品を再利用することにした。

いい人だったのに・・・。戦国の常と知っていてもやはり悲しいものだなあ。

しんみりとしながら、鎧兜の修復作業に移る。面倒だが誰に松永の息がかかっているかわからないので他人任せには出来ないのだ。

修復出来たのでひとまず自分の部屋の前で待機させておいた。理由は何かそうした方がカッコいいから。ちょっとしたことでも遊び心を出さないと辛くてやってられん。

さて、次は鍛練だ。俺はなるべく人目につかない裏手に回った。誰に松永の息（ry

鍛練をする際は戦に使う人形とは違う鍛練用の人形を使っている。対戦相手用に一体。自分が操る分の二体だ。いざというときスペアとしても使える。

俺の能力は自覚してから今日までの間、大分成長している。動かすだけなら百を越える数の鎧兜位の大きさのものを動かせる位にはな

った。
なのにいまだに『三好三人衆』の二体しか使っていないのは、人間に劣らない動きをさせながらも長時間動かせるのは鎧兜人形二体が限界なのだ。

俺に限らず婆娑羅者は技（能力）を使うと精神的に消耗する。婆娑

羅者にとても敵わない一般將兵が突っ込んでいくのはそういった消耗を狙う側面もある。

消耗を抑えながら戦うには二体が最も都合が良いのだ。

今回は鍛練なのであまり消耗は考えなくて良いので、人形三体を同時に操る。相手用の人形は防御や回避行動をとらせて、それを連携攻撃する。立ち木相手よりは良い鍛練になるので最近はこの形式でやっている。連携攻撃で体勢を崩した人形を長剣で横薙ぎにした。胴体が真つ二つになる。

人形の中には重りの鉄柱も入っているがそれごと斬った。この世界では婆娑羅者なら勿論、強い奴なら一般將兵でも出来ることだ。つくづく非常識な世界だと思つ。

俺の強さは一般將兵以上婆娑羅者未満といったところ。できれば婆娑羅者とは二度と戦いたくない。無理だろうけどせめて逃げ切るくらいには強くなりたい。

日が暮れてきたので鍛練を終え、部屋に戻ると部屋の前で兵卒と思われる青年が待機させておいた人形を見ていた。怪しい。声をかけてみよう。

『どつした？』

「み、三好様！い、いえ何でもないです！」

ますます怪しい。いや、待てよ。今回の人形の出来に見惚れてたのかも！今回は俺もついしみじみちゃったくらい良い出来だったからな！

よーし、パパ自慢しちゃうぞー

未婚者です。

『今回ののはかなり出来が良いだろう！前のは脆くて壊れてしまったが良いのが調達出来たからな！まあ、その本人は不幸なことだったが』

十河さんのことは本当に残念だったが遺品を活用するのは許してくれるさ！戦馬鹿な人だったし

「う、うわあああ！ー！」

あれ、ちょっとどこいくんだ、トイレかな？

「はあ……。」

自分は意気消沈していた。自分の属していた部隊の隊長をしていた十河様が亡くなったからだ。討たれたところを見たわけではないが怪我を負い、治療の甲斐なく死んでしまわれたそうだ。部下の面倒見も良く、親しまれていた人であった。

自分達は三好長逸様の下で働くことになるらしい。あまり良い評判を聞かないが屈指の実力者であるのは間違いない。

そんなことを考えながら歩いていたら道に迷ってしまった。どうしたものと困っていたが人影が二つ見えたので道を聞こうと近づくと三好三人衆の内の二人、三好政康様と岩成友通様だった。どちらがそれぞれ誰なのか区別がつかないが三人衆用の鎧兜を着ている。討死したと聞いたが誤報だったのかと思いをかける。

「申し訳ありませんが少々よろしいですか？」
「……。」

返事がない。再び声をかけてみるも無反応。もしや寝ているのかと思ひ、また声をかけようとしたが

『どうした？』

突然後ろから声をかけられ吃驚した。振り返ると三好三人衆筆頭の三好長逸様だった。ひとまず弁解しようとしたが、いきなり長逸様が自慢するかのようには喋りだした。

『今回のはかなり出来が良いだろう！前のは脆くて壊れてしまったが良いのが“調達”出来たからな！まあ、その本人は不幸なことだったか』

・・・まるで自分の“作品”を自慢するかのようなことを他の三人衆の方々を指して言った。

この時、軍内部で流れているある噂を思い出した。

『三好長逸様は他の三人衆が亡くなったら、失態を犯した将兵を廃人にして代わりにしている。』

聞いた当初は長逸様をやっかむ人が広めた悪評だろうとタカをくくっていたが、まさかと思い、もう一度三人衆の方々を見てみる。

不気味に思えるほど生気の無い佇まいをしていて

鎧兜に色こそ違えど十河家の家紋がついていた。

一目散に逃げ出した。かつての隊長の成れの果てを直視出来なかつ

た。何よりこんな所業を喜んでやる目の前の人物が恐ろしくて堪らなかつた。逃げる！！逃げる！！ニゲロ！！！！

息を切らしながら逃げる。混乱していて何処を走っているのかもわからない。元々迷っていたのだから当然だが

とにかく逃げて逃げて・・・

気づいたら見覚えの無い場所だった。ここまで逃げてようやく冷静になつてきた。

不敬罪等が頭をよぎつたが今は化け物から逃げる事が出来た安堵が勝つた。

此処が何処か見回つてみたら、朽ちた立ち木が数本並んでいたの
で廃棄された鍛練場だとわかつた。

此処からなら兵舎への道がわかる。

今は一刻も早く帰りたいかつた。すぐに帰ろうと走って・・・

ガチャガチャ・・・という音が聞こえてきた。

心臓が止まるかと思った。すぐさま振り返ると鍛練場の奥から聞こえてきているようだ。恐怖が蘇ってきたが案外好奇心は抑えきれないもので恐る恐る奥へ踏み出した。進む度に音が大きくなってきているのがわかる。
そしてついにその原因を発見した。

胴体が横に真っ二つされているのに這いずり回っている武者が……

> 主人公 side <

しまったあああ……。鍛練場の人形を片付けていなかった。回収にいった時、なんかさっきの青年が気絶していたけど仕方ないね。

鍛練用の人形の操作を止めていなかったから暗がりて凄く不気味に見えたし。すまん、青年。

とりあえず青年は兵舎へ返しとこう。あつ、後で起きたら人形の不始末について謝らないと。人形を操るのは俺だけだから俺の仕業つてバレてるだろうし。まあ立場的に俺の方が上だから卑屈に聞こえないようにしないと。この時代は面子が大事だしね。いつ起きるかわからないから他の兵に伝言を頼んでおこう。ついでに自慢話もしたいから……

『驚かせてすまなかった。詫びに出来の良い人形が出来たら真っ先に見せてやるう。』

翌朝、何か叫び声が聞こえたけどどうしたんだろ？

ちなみにこの件以降、三好長逸隊の兵は噂に怯え、皆死に物狂いで戦う死兵となったそうなの。

第一 五話 年寄りの話としつこい自慢話は聞き流すもの（後書き）

閑話のはずが文字数六千越え・・・。

ああ、文章構成力が欲しい・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7205m/>

『必殺非業』・・・？え、なにそれこわい

2010年10月11日11時10分発行